

第3節 考察

1 近江系弥生式土器の成立と展開

山城における弥生式土器の地域色を考えようとした場合に、その地理的な特性のために周囲の各地域の文化的影響を強く受けている反面、独自のものを創出する力に乏しかったものと言われている。長刀鉾町遺跡の資料を検討してみると、畿内中心部の土器様式を骨組みとしながらも、中期から後期を通して近江地方との共通性の強いことが判る。

ここで甕形土器に注目してみると、第2様式土器を一括出土したS K1003において、畿内中心部の第2様式土器と同様な特徴を備え、佐原真氏によって大和型と呼称された甕形土器¹⁾(甕A)と共に、近江型の甕形土器²⁾が伴出している。この近江型の甕は口縁部が一旦外反して開いた後に端部が緩く立ち上がるもので、粗いハケ状工具によって、体部外面はタテハケ、端部外面をヨコハケ調整を行うことを特徴としており、口縁部内面にも同一工具によって波状文を加えるのを通常とし、頸部にも直線文を加える例があるなど、装飾性に富む特異な甕形土器である。しかし、この近江型甕形土器の中に、山形口縁をもつもの(甕C)と、そうでないもの(甕B)の二者が存在していることには十分に注意しなければならない。

現在、この近江型甕形土器の編年観は大いに揺れ、従来の第2様式とする考え方から一転して、第2様式後半³⁾もしくは第3様式⁴⁾とする考え方が支配的になりつつある。そこで長刀鉾町S K1003出土資料をもって再検討してみるならば、S K1003からは第1様式土器を伴出しており、しかも、これを壊して作られたS K1001にも第2様式土器を含むことから、間違いなく第2様式に所属するものといえる。また型式学的観点からは、近江型甕形土器は前述の通り山形口縁のものと、非山形口縁のものを明確に区別して考えるべきであり、後者は以後の様式に受けつがれるものの、山形口縁のものは、ほぼ第2様式に限定できるもので、その口縁端部の立ち上がり方と段の緩いことからみて、先行型式と考えるべきである。

そこで、この山形口縁の甕の出自について考究するならば、遠賀川式以来の弥生式土器の中には勿論、凸帯文土器の中にも求めることが不可能である。それならば独自の創出と考えるべきなのであろうか、否。近江地方の縄文晩期土器に注目してみると、滋賀里式土器の中には頭初より四単位の山形口縁甕が存続しており、同I式からIII式に顕著である。しかし、西日本を席巻した凸帯文土器の時期(同IV～V式)にはその影をひそめてしまっている。ここでS K1003出土の山形口縁甕の内、甕C-Iと分類されたものに注目してみると、甕C-IIとの間に大きな懸隔を有していることに気づく。それは、器肉が薄手であり、前述した甕C-IIの粗いハケメ調整と異なり、調整が極めて丁寧で平滑であることに加えて、口縁部内外面に紋飾をもたず、口唇部に刻目をもつことである。この特徴は、滋賀里III式の山形口縁をもつ甕形土器⁵⁾と著しい共通性を有していることに気づかずにはいられない。両者の相違点は外面調整がケズリであるか、ハケであるかという以外にはほとんど見出しえない。この事実から、S K1003出土の山形口縁甕の内、甕C-Iは第2様式に一般的で近江・山城にいくつかの類例の認められる甕C-

IIの先行形態とすべきものであり、かつ、近江の晩期縄文式土器と甕C-IIとの型式学的連絡の隙を埋める存在としてクローズアップされてくるのである。SK1003ではヘラ描沈線をもつ第1様式の甕形土器を伴出しているの、あるいは甕C-Iは前期まで遡らせるべきであるのかも知れない。

以上述べて来たように、第2様式に成立する近江型甕の祖型を滋賀里III式の山形口縁甕と仮定し、この独特な弥生式土器を近江地方の晩期縄文式土器からの伝統の上に成立したものと考えてみた。

このように畿内地方であっても周辺地域では弥生時代中期においてすら晩期縄文式土器の伝統を色濃く残しているという事実は、遠賀川式土器文化、いいかえれば前期弥生文化の定着が不十分で点的なものでしかなく、依然として縄文文化の伝統を継承していたことに他ならず、弥生文化の担い手が縄文人達であることを如実に示すものであろう。

同様の例は紀伊地方でも認められ、太田黒田遺跡を中心として分布する紀伊型の甕もやはり晩期縄文式土器の伝統下に第2様式の段階に成立する土器である⁹⁾。この紀伊型甕は器表の調整にケズリを用いることを特徴しており、その頸部の緩く内弯する器形からみても凸帯文土器からの系譜を窺うことができるから、晩期終末の伝統が弥生時代中期初頭まで持続されていたものと考えることができる。これに対して近江型甕の場合、それよりも古い段階の土器様式の伝統が継受された理由は凸帯文土器文化の浸透が不十分であったためと理解されよう。

同様に晩期縄文式土器との関連で始めて理解しうるものの一つに、近江系広口壺の口縁部内面に付けられたコブ状突起、同細頸壺口縁端部に付けられたつまみ上げ小突起を挙げることができる。これらの祖型と考えられるのは、前述の近江型甕形土器の祖型と仮定した滋賀里III式の時期から特に顕著になる甕及び鉢形土器の装飾法であり、単独の半円形突起も存在しているが、リボン状もしくは双頭状の如く、2個の突起を1組としたものが最も一般的である。この事実は第2様式の近江系壺形土器での突起のあり方とも対応するもので、双頭状の半円形突起は2個一組のコブ状突起へ発展したものと考えられるし、リボン状突起は下方へ延びて口縁部外面を飾る耳状突起(棒状浮文の祖型)へと進展したものと考えることができる。この近江系弥生式土器のメルクマールとも言えるコブ状突起は次第にその形状を退化させながらも、強い伝統を維持しつつ第3様式新段階まで存続している(217)ことは注目に値しよう。また、本来口縁部を飾るべきこの装飾法が壺の体部外面を飾る装飾法として新方向を見出すのは比較的早い段階であり、本遺跡例⑦の他にも、伏見区深草遺跡例⁷⁾や高槻市安満遺跡例⁹⁾がある。

ここまで、近江系弥生式土器の成立をめぐる、晩期縄文式土器との関係について専ら述べてみたが、勿論近江系弥生式土器の特徴をそれのみによって述べることは不可能である。近江系弥生式土器を特徴づけるもう一つの要素は、施文具の扱い方の特異性であり、第1様式のヘラ描沈線の多条化に対応して出現したと考えられる半截竹管やこれを複数束ねた施文具の多用及び複帯構成の櫛描文の採用など弥生文化の中で前段階からの発展としてとらえられるものである。また、口縁部内面や外面複帯構成櫛描文様帯を切って施文される縦描きの文様は伊勢湾

地方とも共通するもので、さらに東方の弥生文化との関係も十分に注意する必要がある。

近江系弥生式土器の諸特徴を十分に説明しつくすことはできなかったが、その分布について検討してみると、滋賀県側の資料が未だに十分でないものの、山城地方でのあり方が徐々に明らかになりつつある。第2様式の段階に限定してみても、山形口縁を呈し内面に波状文をもつ甕形土器(甕C-II)⁹⁾は近江では南滋賀遺跡など琵琶湖南岸に多く、山城地方では本遺跡の他、市内山科区中臣遺跡¹⁰⁾・同伏見区深草遺跡¹¹⁾・長岡京市神足遺跡¹²⁾に認められ、さらに口縁部内面に波状文をもち、大和型の甕が近江的に変容したものについては上記遺跡の他に遠く唐古遺跡にも2例が報告されている¹³⁾。またコブ状突起をもつ壺形土器は滋賀県守山市服部遺跡で良好な資料を出土している¹⁴⁾ようであるが、山城では本遺跡・中臣・深草の他、左京区北白川追分町遺跡¹⁵⁾に認められ、さらに摂津安満遺跡にも類例がある。以上の分布状況からみて、近江系弥生式土器の分布圏の中心は市域東部に限定されるようであり、本遺跡の資料が中臣及び深草遺跡の資料と器種や器形・紋飾等の多くの点に亘って酷似している点からみれば、この3集落は鴨川の水利を活かして互いに交流が深かったものと考えられる。しかもこの3遺跡における近江系弥生式土器の比重の大きさから考えれば、ただ単に近江の土器が伝播もしくは搬入されたのではなく、この地域が近江地方と共に独自の文化圏を形成していたものとする方が自然であろう。また淀川水系を下って摂津地方とも交流があったことは、この文化圏の影響力の大きさを反映したものと言えるであろう。

さて、第2様式の段階に確立された近江系弥生式土器の伝統は次代に確実にひきつがれて、ついには後期の独特な土器群を生む。これは甕形土器の口縁部の変化に注目してみると、第5様式の所謂受口状口縁へ発展していくことが無理なく捉えられるという事実であり、具体的には、第2様式で山形口縁の甕から緩い段をもって立ち上がる非山形口縁の甕へ発展したものが、第3様式には一般的となり、さらに第4様式には立ち上がりの角度を強め、ついには直立もしくは内傾するに至り、第5様式の完全な受口状口縁へと接続していく過程が完全に把握できるのである。同時に第3～4様式に属する近江系土器を出土する遺跡は市域南部及び西部に拡がって、新たに南区中久世遺跡¹⁶⁾や伏見区鳥羽遺跡¹⁷⁾、右京区西院月双町遺跡¹⁸⁾などがこの土器文化圏に取り込まれるのは、長刀鉾町・深草・中臣などの母村からの発展的分村状況を示すものかも知れない。

再び近江型甕の記述に戻るが、第3様式の段階では口縁立ち上がり部外面の粗い横ないし斜ハケが残るが、第4様式では本遺跡弥生溝2出土例(101)では既にこれを欠き、立ち上がり部は内傾する。第4様式の受口状口縁甕の好例としては他に滋賀里遺跡11号方形周溝墓出土例¹⁹⁾及び中久世遺跡出土例²⁰⁾があるが、共に直立する立ち上がり部をもち、胴部上半に数段の櫛描直線文を施し、その間を斜位の列点文で埋めつくしていることは第5様式の受口甕の装飾法の先駆をなすものとして注目される。ただし、この装飾法も第2様式以来のものが再構成されたものにすぎないことには十分注意しなければならない。もう一つ近江型甕から第5様式の受口状口縁甕への発展を通観して注目されるのは、頭初から最後まで外面調整にハケ状工具を一貫して使

用していることであり、第3様式に現われる畿内中心部の最新技法である叩きが全く使用されずに終わったことは、近江系弥生式土器の在地性の強さを示すものの以外の何者でもない。

最後に近江系弥生式土器の一貫したスタイルとしての受口状口縁の甕や細頸壺の内傾する口縁部について一考するならば、その器形を維持させたものは単なるファッションとは考えられず、機能であったものと推測される。それは近江系弥生式土器(大和型甕を除く)に伴う蓋形土器が著しく少ないことから考えて、当該地方では木製の蓋を調理用の甕や貯蔵用の壺に用いたものと考えられるのである。ゆえに、近江系弥生式土器の文化はまた木製蓋の文化であったと言い換えても良い。この伝統は受口状口縁甕が祖型となって生んだ伊勢湾地方のS字状甕形土器にも引きつがれていくものと考えられるのである。

註

- 1) 佐原真・井藤徹『池上・四ツ池』(大阪, 昭和45年)。
- 2) 佐原真『弥生式土器集成』本編(東京, 昭和43年)。
- 3) 集成において佐原氏は甕Bを甕Aより後出のものと考えている。また中臣遺跡では第2様式古段階では近江型の甕は含まれていないという。
- 4) 福岡澄男『中期甕形土器の一類型』(『湖西線関係遺跡調査報告書』所収, 大津, 昭和48年)。井藤暁子『入門講座弥生式土器—近畿2—』(『考古学ジャーナル』202所収, 東京, 昭和57年)。
- 5) 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』(大津, 昭和48年)の図版33A170・A171。
- 6) 註1)と同じ。
- 7) 杉原荘介・大塚初重『京都府深草遺跡』(『日本農耕文化の成生』所収, 東京, 昭和36年)の第3図2。
- 8) 森田克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査書』—9地区の調査—(高槻, 昭和52年)の第3図16。
- 9) 佐原真『琵琶湖地方』(『弥生式土器集成』本編所収, 東京, 昭和43年)。
- 10) 林屋辰三郎編『史料京都の歴史2考古』(京都, 昭和58年)の図版46—119・120。
- 11) 杉原荘介・大塚初重『京都府深草遺跡』(『日本農耕文化の成生』所収, 東京, 昭和36年)の第5図17。宇佐晋一・小川敏夫・星野猷二『深草遺跡』(『古代学研究』第39号所収, 堺, 昭和49年)の第3図。
- 12) 第6回調査成果交流会(1982・9・30)における長岡京市埋蔵文化財センター作成資料の第2図66。
- 13) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都, 昭和18年)1943の図版51。
- 14) 1982年秋に大阪市立博物館で開催された考古展“古代日本の再見”で実見。
- 15) 第6回調査成果交流会における京都大学埋蔵文化財研究センター作成資料のPL—3
- 16) 註10)の図版50—137, 図版51—140。
- 17) 同上図版51—142
- 18) 同上図版488—1526・152e
- 19) 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』の第50図—B5
- 20) 註10)の図版51—140